たことをそのまま習っているだけではだめで、ニューコンチネント（新しい大陸）を発見することが大事だ。そのために夢をもって営々と間断なく、システマチックに、あきらめないでやっていくと、やがてそこに幸運の女神がチラッと通り過ぎることがある。それをつかまえることだ」とおっしゃいました。熊ノ郷先生は、今まさに、それをなさっているんだと思います。

大阪・関西を強くする

堀井　先ほど、研究とは師匠から弟子へ代々伝えていくことが大事だといわれましたが、大阪大学には山村雄一元総長をはじめとする方々が作られた研究拠点が、今やクラスターを形成して切磋琢磨されていますね。阪大微生物病研究所の近くには国立循環器病センターやバイオの研究施設があり、神戸大学や京都大学、山中伸弥教授がおられた奈良先端科学技術大学院大にも近い。研究者にとって、こうした環境は大きな強みになりますね。

熊ノ郷　おっしゃる通りです。共同研究がしやすいですし、勉強会や研究会で一堂に集まるにも便利。携帯電話やメールがあるとはいえ、実際に会って話すことはとても大事だと思います。

堀井　ところで、大阪人は経済優先で儲けることばかり考えていると他都市から揶揄されることがありますが、これは大きな偏見です。大大阪時代と呼ばれた昭和初期には、山口玄洞や竹尾治右衛門ら財界人が支援して、微生物病研究所の前身となる施設を作りました。江戸時代に遡れば大坂商人が懐徳堂という学問所を設立し、その出身者が弟子を育て、さらにその弟子が弟子を育てて、幕末には大阪大学医学部の前身となる適塾が開かれました。

熊ノ郷　岸本忠三先生は、「ノーベル賞級の発見をしても教科書の1行にしかならないかもしれないが、人を育てることで、優れた研究者や研究成果が拡大生産されていく」とおっしゃっています。歴史的に財界の暖かい支援を受けてきた大阪大学医学部は、その懐の深さに支えられ、中央から発信される情報に振り回されることなく自分たちの信じた研究を続ける気概があったからこそ、今日の免疫学やバイオ研究のメッカとしての伝統が培われてきたんだと思います。

堀井　それがクラスターの形成につながり、大阪・関西の学術研究が発展して文化力が高まるのだと思います。熊ノ郷先生には、今後もその先頭に立って力強く医学界を牽引していただければと思います。本日はありがとうございました。

（2010年10月15日／大阪大学免疫学フロンティアセンターにて）

熊ノ郷 淳（くまのごう あつし）氏

1991年大阪大学医学部卒業、同大付属病院、大阪逓信病院（現NTT西日本病院）での内科臨床研修を経て、93年大阪大学医学系研究科大学院（岸本忠三教授）で研究。97年大阪大学微生物病研究所分子免疫制御分野（菊谷仁教授）に移った後、セマフォリンの免疫系における役割を初めて解明。2003年同分野助教授、06年微生物病研究所感染病態分野教授に就任。07年10月より現職。05年第1回日本学術振興会賞、第8回日本免疫学会賞他、受賞多数。2010年10月『免疫セマフォリン分子群の同定による新規免疫制御機構の研究』で第28回大阪科学賞を受賞。